11　町産業振興の一翼を担う古代米の生産支援

■　宇多津町古代米生産組合　■

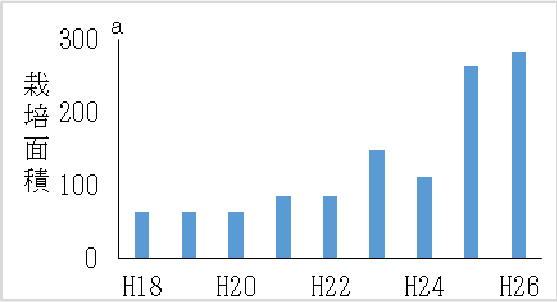
（中讃農業改良普及センター　大矢玲二郎　山田浩三　原井則之　髙八　弘　片桐弘樹
吉田一史　○山地茂伸　三木　洋　山田千津子　藤田大輝）

●対象の概要

宇多津町古代米生産組合（以下「組合」）は、農業振興のみでなく宇多津町の推進する「産業振興」の観点から、平成 18 年 4 月 1 日に組合員 4 名（現在 8 名）で設立され、古代米の生産並びに古代米を利用した加工品の開発及び販売までを手がけることを将来目標として活動を行っている。

組合で生産している古代米は「朝紫」（早生品種）と「紫黒苑」（晩生品種）の２品種の黒米で、アントシアニン（ポリフェノール類）などの機能性成分が含まれている。近年は、組合の営業活動とも相まって、酒造用をはじめ麺用や菓子用への仕向けなど、着実に需要が増加してきた。

実需からは①品種本来の着色の発現、②安定供給と供給量増大が要望されており、普及センターは組合と協議しながら対応策を講じている。



図－１　古代米作付面積の推移

●課題を取り上げた理由

実需からは、濃い黒紫色を呈している黒米が求められている。一方、生産面では、単収の低迷や病害虫被害が問題となり、その対策が求められた。このため、生育調査を通じた「栽培体系の確立」及び「より細かな適正管理」などの支援が必要となった。

さらに、地域産業として確立するための第一歩として栽培面積（生産量）を拡大する必要があり、法人化も見据えた組合の体質強化について、情報提供や意見交換などの支援も行うこととした。

●普及活動の経過

１　栽培体系の確立

１）「朝紫」の黒紫色発現のための田植時期の設定＜21～26年度＞

着色不良の主原因が出穂期以降の高温であることから、出穂期目標を９月１日に設定し、出穂までに要する日数を差し引いて田植時期及び播種時期を設定した。

表－１　「朝紫」の出穂期と着色の関係

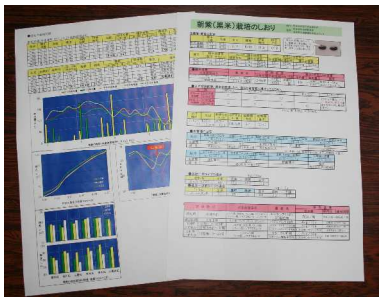
	H21	H22	H24	H25	H26
田植日	7/7	7/5	7/14	7/13	7/12
出穂期	9/3	8/21	9/3	9/1	9/2
着　色	良	不良	良	良	良

２）単収確保のための植付本数等の設定＜22～26年度＞

いずれの品種も単収７～7.5俵を目標としているが、遅植えとなる「朝紫」は分けつが抑制されるため、田植に際しては、株間18cm以下、１株当たり植付本数８本程度を目安とした。

３）栽培しおりの作成・提供＜23～26年度＞

毎年度、栽培しおりを加筆・修正し、５月の栽培講習会で栽培のポイントや適正な水管理を呼びかけた。



図－２　栽培しおり

２　優良種子籾の確保＜25、26年度＞

種子籾は組合の自家採種であったため、交雑等により白米の混入も見られるようになってきた。そこで、購入種子により種子更新を図ったところ、ばか苗病が多発したため、再度自家採種を行うこ

ととした。自家採種にあたっては、優良種子を確保するための厳密な管理、具体的には、有色米が判別できる玄米播種、ほ場の限定とおろこばえや異品種株の抜き取りの徹底を図った。

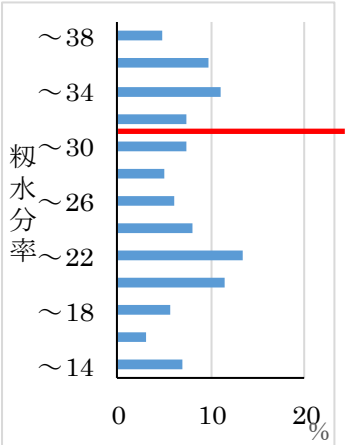
３　栽培基準田の現地巡回＜25、26年度＞

組合員別、品種別に各１ほ場を栽培基準田とし、現地巡回及び生育調査、資料作成などを積極的に行い、適正管理を強力に支援した。

また、収穫前には、県内外の実需者との交流会を開催し、商材としての品質等について意見交換を行った。

４　収穫期の判定＜24～26年度＞

晩生品種の「紫黒苑」は収穫期が10月下旬以降となり、気温の低下に伴って収穫期の判定が難しくなるため、基準田毎に籾の水分率分布を調査し、適期収穫の推進を図った。



穂の抜き取り調査の結果、籾水分率が 30％以上の割合が、籾全体の３割以下となれば収穫可能と判断した。（「紫黒苑」に限る。）

図－３　収穫前の籾水分分布

●普及活動の成果

１　実需の要望する黒紫色米の生産

出穂期を９月１日以降となるように播種・田植日を設定することで、着色は良好となり、実需者から高い評価を得ている。

また、種子更新とおろこばえ等の抜き取りの徹底により、白米等の混入も無くなり、色彩選別機を介さずとも出荷が可能となった。

２　単収の増加

①栽植密度の見直し、②病害虫の適期防除、③適正な水管理、④適期収穫などにより、平成22 年産以降は目標単収（「朝紫」450kg/10a、「紫黒苑」420kg/10a）以上の単収を維持している。

表－２　単収の推移

	朝紫（kg／10a）	紫黒苑（kg／10a）
26 年産	468	422
21 年産	448	390

３　安定した需要の確保

24 年産までは県内酒造会社への供給が中心であったが、25 年産からは、現地交流などを経て県外穀物会社との契約も成立し、安定した需要が確保され、供給量を増やして欲しいとの要望を受けている。

４　組織体制強化の意欲の醸成

生産性の向上や組合の経営改善、さらには対外的信用の確保などの観点から、組合の法人化への機運が向上している。

●今後の普及活動の課題

１　栽培面積の拡大

26 年産は 2.7ha 程度の作付であったが、需要の増加に伴い、今後、町内遊休農地や近隣市町からの組合員の募集などによる栽培面積の拡大が求められる。

２　基本技術の励行による高品質・安定生産

組合員間で品質や単収のバラツキが見られるため、講習会の開催、情報提供により水管理や病害虫防除などの基本技術の励行を推進・支援する。

３　肌ずれ米対策の検討

糠層に色素を多く含んでいるため、肌ずれ米となると商品価値が著しく低下する。収穫期の籾水分などとの関係について調査し、肌ずれ米を回避する対策を講じることが求められている。

４　法人化による組織体制の強化

古代米を地域産業の一端に据え、その中核的組織としての組合の体制強化を図るために、法人化について助言、情報提供等の支援を行う。

また、生産だけでなく、加工・流通なども含めた６次産業化への取り組みについても支援する。

図－４　古代米の収穫